

五月総評 立花開

精神に夏野があつて鹿が駈ける 山本先生 東京都
心ではなく「精神」にあるという表現のほうが、より魂に近い気がする。夏という、すべての命が活気づく季節が精神に在る。鹿の艶やかな身体が、夏の日差しを美しく反射させる。駆けていく姿は、記憶の中の誰かのような、自分のような、混ざり合った存在なのだろう。

恋人が小指から蛇口になっていく 千葉羅点 愛媛県
「小指から」ということは、変化が継続されるということ。恋人は恋人という概念を手放していく。完全に蛇口になったあとの心はどこにいつてしまうのだろう。無機物のなかでも、特に無骨で冷たいもの。涙だったかもしれない水さえ、自在に出せるものになってしまう。

入梅の耳に涙があったかい 檜野 美果子 宮城県
この時期の空気の独特な冷たさは、人を追い詰める。仰向けに寝転がり、雨音を聞くとともになしに聞いている主体。じわじわと溢れてきた涙が、温度を失う前に耳に流れ込んでくる。悲しさも、溢れたては温かい。

離婚届もらいにきました青葉風 木村 菜智 宮城県
大きな変化も恐れない心に吹く風。生き続ける限り変化は常にある。本当は常に進んでいるのだが、私たちはすぐに忘れてしまう。「もらいにきました」という言葉に、夫婦の間ではすべて終わった状態であることが伺える。悲しさを内包した清々しさ。

干しているシーツの上に
手をおいて

空の遠くの方を見ていた 福山ろか 埼玉県
散文的だが、韻律の中に当てはめることで物語の色が強くなる。日常こそ物語であることを、私たちは作品を通して気付かされる。「今、この瞬間に居る」という連続。シーツの肌触り、頬を撫でる風、空の遠くで動く雲。奇を衒わない素直さが満ちた作品。

春光のいれものめいている校庭

深谷 健 埼玉県

学校は方舟のようだ。いつも何かを容れて、ゆるやかに揺れている。誰もが通い、そして出ていく場所であり、生徒が一人もない校庭でさえ「いれもの」の役割を背負わされる。学校の中に差し込んだ光のみが守られている。

湿気せんべい

そこにありをり食べりぼり

背腹 颯太 北海道

「ありをりはべりいまそかり」を意味ではなく音として取り入れる面白さ。意味として取り入れてはいるが、そこはただの導入であり、グラデーションのように音への味わいへ着地させる。湿気せんべいがぼりぼり食べられるかはやや不明だが、一心に食べているかわいらしさがある。

道徳心が中古のくせに

内海千智 東京都

なんという皮肉った言い方だろうか。だが、そう思わざるを得ないやり取りの蓄積があったのだ。対象の優しく振舞う現在の姿をまがいものだと感じている。人との関係は蓄積である。根底がまともではないと感じたら、どんな優しさも恐ろしい。

ふたつ買い

ふたりで飲んで

そのあとに

花瓶となったあなたのコップ

箭田儀一 広島県

すべてが「コップ」にかかっている。が、本当はコップそのものではなくそこに含まれた時間や思いに意味は集約されている。時間や思いこそ消えないのに、触れることは決してできない。コップに触れながら、あなたとの思い出に触れる。

淋しくて

手を差し伸べるボランティア

一色否鳥 東京都

ボランティア、と呼ばれる自己の救済行動がある。他者を救うことで自分も救われることはままあるが、後者を目的として行動することは悲しい行為である。淋しさは人を狂わせる。無償という美がどこまでもその悲しさを正当化してしまう。